

概 要 報 告

実施期日	令和8年8月4日(火)
部 会 名	小学校 特別活動部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善(含む個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実)

テーマ

『対話的な集団活動による児童の人間関係の形成』

提案概要

「Project Adventure」(以下、PA)、「行事に向けての話し合い活動」、「ほめ言葉のシャワー」、「ふりかえりジャーナル」の4つを柱とした学級集団づくりに取り組んだ。単元「お互いの良さを認め合う集団づくり」では、特にPAと行事に向けた話し合い活動を中心に実践を行った。その結果、児童が互いの考えや良さを認め合う機会が増え、協力して活動する姿が見られるようになるなど、学級内の人間関係をより豊かなものにすることができた。

① 単元設定の理由

児童の実態として、コロナの影響を大きく受けた時期に学校生活を送ってきたことから、児童同士の人間関係が十分に育まれにくい状況にあった。健康の安全を第一に指導されてきた学年ということもあり、人間関係の希薄さやコミュニケーション能力の未熟が見られ、他者との意思疎通が苦手な児童が多かった。そのため、児童間の豊かな人間関係を形成していきたいと考えた。

② 実践の内容

児童同士の関係性をより良いものにするため、1年を通して「PA」「行事に向けた話し合い活動」「ほめ言葉のシャワー」「ふりかえりジャーナル」の4つの実践を柱とし、お互いの良さを認め合う集団づくりを目指した。

PAは、体験的な活動を通して人間関係を育成し、自己の成長を促すことを目的として、年間を通して実施した。4月は教員と児童との信頼関係づくりを中心に据え、児童同士の身体的接触や必要なコミュニケーション量が少ない活動を取り入れた。その後は、児童の実態や学級の成長に応じて、より多くのコミュニケーションを必要とする活動や、協力しなければ解決できない課題へと段階的に発展させた。また、活動を行う際には、「参加・協力」「一生懸命」「心も体も安全に」「公正・公平」「楽しむ」の5つをルールとして共有した。このルールは学級づくりにも共通しており、PAは単なるレクリエーションではなく、共通の目標を達成する過程で児童同士の自然な対話や協力が生まれることを大きな特徴としている。

行事に向けた話し合い活動では、修学旅行や文化的行事、校外学習などに向けて、児童が目的や役割を共有し、互いの考えを伝え合いながら合意形成を図る場を設定した。話し合いを重ねることで、相手の意見を尊重しながら協力して課題を解決する態度を育成した。

ほめ言葉のシャワーは、友達の良いところを紙に書いて伝え合う活動であり、前期と後期にそれぞれ1回ずつ実施した。自分の良さを書いてもらうだけでなく、友だちの良さを書くことに喜びを感じる児童も出てきた。

ふりかえりジャーナルは、児童がその日の出来事や感じたことを文章にまとめ、担任がコメントを返すことで双方向のコミュニケーションを図る活動として年間を通して実施した。児童の日々の思いを把握するとともに、児童理解を深め、一人一人に寄り添った指導につなげることを目的とした。

③ 実践の成果

・鎌倉探検のグループ決めでは、仲の良い友達と離れたがらなかった児童が交友関係を広げようとした。

児童の方から「関わりの少ない人と同じ班になって交友関係を広げたい」という声が出た。

- ・人間関係に不安を抱え、保健室で過ごしていた児童がPAの時間に参加できるようになり、1月頃からはPAのみならず、1日中教室で過ごすことができるようになった。
- ・最後の授業参観で実施した国語科「今、私は、ぼくは」の学習では、児童がクラスメイトに向けて自分の素直な気持ちや思い出を自分の言葉で表現することができた。また、互いの発表を温かく受け止める姿も見られ、安心感や信頼感のある学級集団が形成されていることがうかがえた。

質疑応答

Q. 保護者参加型のPAを実施した時の活動内容について

A. パイプラインを行った。

⇒パイプラインとは一人一人が半筒状のパイプを一つずつ持ち、それらを繋ぎあわせながらピンポン玉をゴールとなるカップまで運ぶ活動。

Q. 1年間の中で特別活動をどれくらい設定したか

A. 学習指導要領に基づき、年間35時間程度の特別活動を設定して実施した。その中で、PAの活動を4月当初は学級づくりや児童同士の関係形成を目的として週1回程度実施した。その後、2週間に1回、月1回程度へと実施頻度を調整し、年間を通して継続的に取り組んだ。

Q. 特別活動の中でほかにどのような取り組みをしたか

A. クラス目標を決めたり、行事に向けた活動を行ったりした。

協議の柱及び協議概要

協議の柱：特別活動を日常の授業づくり、学級づくりに生かすために

キーワード：相互理解、合意形成、主体性、成功体験

- ・特別活動の中でよりよい人間関係を育むことができれば、自分の考えを受け入れてもらえる安心感が生まれ、普段の授業の中でも発言しやすい雰囲気が作られるのではないかと。
- ・小学校では、PAのような体験的な活動や学級会を通じた合意形成の経験を重ねることで、児童の主体性や協働性を育むことができる。一方で、中学校では時間的な制約があり、特別活動の時間の多くが行事に向けた活動に充てられる現状がある。そのため、発達段階に応じた主体性の育成を継続するためにも、特別活動における小中連携の在り方を考えていく必要があるのではないかと。
- ・「ほめ言葉のシャワー」のように、帰りの会でお互いの良さや頑張りを認め合う活動を取り入れている。授業内で時間を作らなくても日常的に伝えあう機会があれば、お互いを肯定的に認め合う学級になっていくのではないかと。
- ・特別活動の時間の中で子どもたちに成功体験を積み重ねることができれば、授業の中でも自分の考えに自信を持って発言できるようになるのではないかと。そのために教員が適切な活動設定や環境づくりをしていく必要がある。

まとめ概要

今回の協議会では、参加した教員自身が「デートの約束」というPAを実際に体験した。活動を重ねるにつれて、参加者同士の表情が次第に柔らかくなり、自然な会話や関わりが生まれていく様子が見られた。この体験を通して、PAが児童同士の関係づくりにも大きな効果をもたらす活動であることを実感することができた。

また、特別活動の実践が単発的な活動で終わることがないように、年間を通して明確なねらいをもち、計画的に取り組むことの重要性について確認した。その際、児童にも活動の目的や意義を共有することで、より主体的な活動につながると考えられる。

さらに、特別活動における視点や目的、目指す児童の姿について協議を深める中で、教員、学年間で考えを共有しながら実践を検討し協議を重ねることで、児童に還元することができ、認め合うことのできる学級づくりにつながっていくと考えられる。